



## 観客参加オブジェ 「私の心に残る曲」



236曲の応募がありました。楽器のイラストのまわりに皆さんからの曲が画面いっぱい貼られて、指揮者の松笠人形も加わり、賑やかな「もう一つのコンサート」を創ることができました。

貼られている曲名や、コメントをよみながら、懐かしく思い出されたり、歌を口ずさんだりしていらっしゃる様子をうかがうことができ、この企画をやったよかったと思いました。

提出された曲の中から、いくつかの曲をテープやCDで流させてもらいました。



### 心に残る曲応募

第1位 7票：cosmos

第2位 5票：早春賦、変わらないもの

第3位 4票：朧月夜、花は咲く、ふるさと

第7位 3票：高校3年生、秋桜、なごり雪、月の砂漠、川の流れのように

第1位のcosmosは、狭山少年少女合唱団の大好きな曲で、特に数年前に交通事故でなくなった小学4年生の団員の大好きな曲で、定期演奏会では何時も歌われる曲です。

コメントは、自分自身の思い出・心に残る曲もそうですが、子どもさん、お父さんお母さんなど家族に関する思い出などが多く寄せられていて心温まる思いがしました。

ご協力有難うございました。

オブジェ担当 板屋捷子

## さねとう あきら氏を悼む

狭山市在住で、児童文学の巨匠であった さねとうあきら氏が、3月7日にその81年の生涯に終止符を打たれました。

日本を代表する創作民話作家でもあった さねとう先生は、第1回の狭山市民芸術祭から、私たち文団連の活動に深く関わって下さり、狭山の歴史や伝承・伝説を土台にした民話の創作とその上演に、文字通り身を削って貢献して下さいました。

文団連の設立後、21世紀の始まりに開催する第1回市民芸術祭にふさわしい催し物の相談に伺ったとき、「狭山市2000年の歴史」を題材にした劇づくりを提案され、自ら脚本・演出を担当。何も知らない、よちよち歩きの文団連会員団体の面々を叱咤激励しながら「道・土・炎」の三部からなるページェント劇『狭山いまむかし』の上演にこぎ着け、市民会館大ホールを満たした観客を「さねとうワールド」で魅了してしまったことは、今も鮮明に記憶に焼き付いています。

また、10周年記念芸術祭では、再び脚本・演出を引き受けていただき、「狭山の民話」「狭山の小宇宙」の創造にチャレンジ。入念な聞き取りを経て、13シーンからなる『さやま民話風土記』が出来上がり、新しい民話や唄が誕生しました。

異種の団体のコラボレーションで一つの舞台を創り上げるという、私たち文団連の芸術祭企画公演の基本路線は、さねとう先生のおかげで形成されたといっても過言ではありません。偉大な巨星が夜空の向こうへ旅立ったいま、私達に出来ることは、「これらの民話や唄が、百年後も土着のものとして生き残っている」ように、語り続け、歌い継いでいくことしかありません。

さねとう先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。 合掌

事務局長 小川忠史